GM 鶴牧-3 環の会

第 47 回クラシックを楽しむ会

2017 年 9 月 24 日（日）18:00～（1 時間 55 分、休憩除く）

タイトル：**楽劇「サロメ」（R・シュトラウス）**

会場等　：オランダ国立歌劇場公演 2017
　　アムステルダム・ミュージックシアター
　　2017 年 6 月 12, 27 日
楽団等　：ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団
指揮　　：ダニエレ・ガッティ（音楽監督）
演出　　：イヴォ・ヴァン・ホーヴェ
出演　　：ランス・ライアン　（ヘロデ、ユダヤの王）
　　ドリス・ゾッフェル（ヘロディアス、ヘロデ王妃）
　　マリン・ビストレム（サロメ、ヘロディアスの娘）
　　エフゲニー・ニキーチン（ヨカナーン、予言者）
　　その他

サロメ、ヨカナーンの”黒い葡萄のような”髪を愛でるが

あらすじ

ヘロデ王の義理の娘サロメは、幽閉されている預言者ヨカナーンの肉体に魅惑。キスさせてと迫るサロメをヨカナーンは必死に避ける。ヘロデの祝宴の席でサロメは**「七つのベールの踊り」**を踊る。歓喜するヘロデ王に、サロメは褒美としてヨカナーンの首を所望。サロメはその生首にキスしてエクスタシーのまま倒れる。

アムステルダム・ミュージックシアター

1986 年にオープンした定員 1600 名の劇場。アムステル川に面し、オランダ国立バレエ団と「ザ・ネザーランド・オペラ」（オランダ国立オペラ）の本拠地。略称はストペラ(Stopera)、建物には Nationale Opera & Ballet と表示されている。

アムステルダム・ミュージックシアター（GoogleMap）

ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団（RCO）

ベルリン・フィル、ウィーン・フィルと並ぶ世界屈指の名門オーケストラ。世界的名指揮者ハイティンク / ヨッフム、シャイー、ヤンソンスの後を継いで、ダニエレ・ガッティが 2016 年首席指揮者に就任。旧称はアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団(1888 - 1988)。

第 48 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**歌劇「仮面舞踏会」（ヴェルディ）**

10 月 15 日（日） 17 時 30 分開場、18 時上映開始

ザルツブルク音楽祭 1990、ショルティ＆ ウィーン・フィル。プラシド・ドミンゴ、レオ・ヌッチの出演と、豪華絢爛な舞台は必見！ このオペラはスウェーデンの啓蒙専制君主グスタフ 3 世が 1792 年に仮面舞踏会の壇上で暗殺された事件が題材。ローマ初演では熱狂した市民が街のいたるところに“ヴェルディ万歳！”の落書き

11 月は楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」、12 月以降、バレエ「ジゼル」、オペレッタ「チャルダッシュの女王」などを予定。

あらすじ

【時と場所】

西暦 30 年頃、エルサレム、ヘロデ王の宮殿

【主要人物】

サロメ（S）：　　ヘロディアスの娘
ヘロデ（T）：　　ユダヤの王、サロメの義父
ヘロディアス（Ms）：ヘロデ王の妃、サロメの実母
ヨカナーン（Br）：　預言者（洗礼者ヨハネのこと）
ナラボート（T）：　ヘロデ王の若い衛兵隊長（シリア人）
ほか

【全 1 幕】

第 1 場

ユダヤの王ヘロデは兄の妻ヘロディアスと不倫し、兄を殺してヘロディアスを王妃にしている。宮殿はいま宴の盛り。若い衛兵隊長ナラボートは、ヘロディアスの娘サロメの美しさに陶酔している。テラスの古井戸の中から、ヘロデに幽閉されている預言者ヨカナーンの不気味な声が聞こえる。

第 2 場

サロメは、義父ヘロデの情欲の目にいたたまれず、宴席からテラスに逃れてくる。サロメは古井戸から聞こえてくるヨカナーンの声に興味を覚え、ナラボートに色仕掛けで古井戸のフタを開けるよう迫る。ナラボートはサロメの色香に我慢できなくなり、ヨカナーンを外に出してしまう。

第 3 場

ヨカナーンを目にしたサロメはヨカナーンの黒い髪、白い肉体に魅了され、本能的な媚態で近づく。ヨカナーンはサロメの母ヘロディアスの罪をとがめるだけで、サロメの誘いには目もくれない。それでもサロメが執拗にくちづけを求めると、ヨカナーンは呪われよと言い捨てて古井戸に戻っていく。

第 4 場

サロメを追ってヘロデとヘロディアスがテラスに出てくる。地下からはヨカナーンがヘロデとヘロディアスの不倫を責める声が聞こえる。ヘロディアスは怒り、ヘロデは預言者の力を恐れる。

ヘロデは下心から、サロメに踊りを要求。最初は拒否していたサロメは、望みのものを与えると言われ、母親の危惧をよそに官能的な**「七つのヴェールの踊り」**を踊る。

ヘロデはサロメの踊りに歓喜、サロメの望みを尋ねる。サロメは「銀の盆にのせたヨカナーンの首！」。母ヘロディアスは忌まわしい預言者の首を所望する娘に歓喜。ヘロデは聖者を殺すことを恐れてとサロメに翻意させようとするがサロメは聞き入れない。

ヘロディアスは、ヘロデの指から死の指輪を抜き取って首切り役人に与え、古井戸へ送り込む。サロメは井戸端で耳を澄ませて「何も聞こえない、なぜ声をたてないの？」と長大なモノローグ。

サロメは、銀の盆にのせられたヨカナーンの首を持ち上げて愛撫し、愛おしげにその唇にくちづけし、「おお血の味がする」とエクスタシーのまま倒れる。その場から逃れようとしたヘロデは恐怖におののき、兵士達に「この女を殺せ！」。

楽劇「サロメ」のオーケストラ

オーケストラは大編成の 105～108 名。広音域、多彩な音色をカバーするため、通常の管弦楽器以外に、ヘッケルフォン*1、タムタム、グロッケンシュピール、チェレスタ、ハルモニウム*2、オルガンなどが必要。コントラバスや打楽器の大胆な扱い方など、当時その独創性は画期的だった。

*1. ワーグナーが提案してドイツの若い楽器製作者ヘッケルが考案したオーボエより 1 オクターブ低い音域のダブル・リード楽器。この楽器が完成したときワーグナーは他界していて、ワグネリアンだった R.シュトラウスの楽劇「サロメ」ではじめて使用された。*2. ポンプ・オルガン、リード・オルガンとも。19 世紀後半から 20 世紀中ごろまで作成された。

資料

出演者

ビストレム

ニキーチン

マリン･ビストレムは、スウェーデンのソプラノ歌手。ロンドンのロイヤルオペラでデビューし、ミュンヘン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ザルツブルク音楽祭、エクサン・プロバンス音楽祭で歌っている。サロメ役は、少女らしい初々しさと狂気じみた淫蕩さ、可憐な声と強靭で力強い声といった、両立困難な演技表現が求められ、しかも舞台には出ずっぱり、長いソロダンスを踊ったあとは長大なモノローグ。このドイツ・オペラきっての難役を、45 歳のビストレムがみごとに歌い演じた凄さ。

エフゲニー･ニキーチンは、ロシアのバス・バリトン歌手。ゲルギエフに認められてマリインスキー劇場を拠点としてワーグナー作品やロシア・オペラの諸役などが主要レパートリー。バイロイト音楽祭 2012 に「音楽祭初のロシア人歌手」として出演が予定されていたが、開幕直前になって右胸にナチのシンボルが描かれていたことが発覚*し、音楽祭から「追放」。*若気の至りと弁明、右胸のタトゥーはすでに上書きして消されていた。

ダニエレ･ガッティ

ダニエレ･ガッティ（1961 - ）は、イタリア・ミラノ生まれの指揮者・音楽監督。27 歳でミラノ・スカラ座にデビュー、続けざまにイタリアをはじめ、ベルリン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場に出演。その後世界各地の名門オーケストラの首席指揮者、歌劇場の音楽監督をつとめている大指揮者。

楽劇「サロメ」の作曲と初演当時

初演当時のサロメ歌手

R.シュトラウスが、ドイツ語訳の戯曲「サロメ」を観て 1901 年オペラ化を思いつき、（台本を作成しないで）戯曲に直接作曲した。1905 年ドレスデン宮廷歌劇場で初演。キリスト教の聖書の物語と、官能的・好色的なものと殺人が組み合わさったオペラに観客は衝撃を受けたが、38 回のカーテンコールで大成功。そのリハーサル中、主演の ”37 歳のおばさん”（R.シュトラウス）歌手は「私はまともな女性」と（みだらな）踊りを拒否。結局「サロメの踊り」を劇場付きバレエダンサーが踊った。初演当時、ウィーン国立歌劇場、コヴェントガーデン歌劇場、メトロポリタン歌劇場などでは何年も上演禁止が続いた。

戯曲「サロメ」の出版と上演

英語版の挿絵、ビアズリー画

オスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」は新約聖書を元にしたフランス語戯曲で 1893 年にパリで出版された。翌年ワイルドの同性愛パートナーのアルフレッド・ダグラスが英訳し、オーブリー・ビアズリーが挿画を描いた。内容の背徳性から、戯曲はしばらく上演できなかった。

日本では 1912 年（大正元年）アラン・ウィルキー一座による「サロメ」が帝国劇場で上演され、小山内薫、佐佐木信綱、大仏次郎、芥川龍之介、島村抱月等が観劇。二年後、島村抱月の芸術座で松井須磨子がサロメを演じ、続けて川上貞奴らがサロメを演じた。

オスカー・ワイルド（1854 – 1900）

オスカー・ワイルド（左）と若き愛人ダグラス卿、2 年後に収監

ワイルドはアイルランド出身の詩人、作家、劇作家。多彩な文筆活動をし、耽美的・退廃的・懐疑的だった 19 世紀末文学を代表する作家の一人。1891 年にフランス語で「サロメ」を執筆。この年、16 歳年下の青年作家ダグラス・クィーンズ卿と親密になり、後にダグラスが「サロメ」を英訳。父クイーンズベリー侯爵*は息子ダグラスを心配して同性愛を糾弾。ワイルドは侯爵を名誉棄損で訴えたが、逆にワイルドの不道徳な生活の実態が公になる。その結果、同性愛で刑事告発されて有罪になり収監。出獄後、梅毒による脳髄膜炎で死亡。

* スコットランド名門貴族の第 9 代公爵。ボクシング愛好家で近代ボクシングのクイーンズベリー・ルールを策定した。

戯曲「サロメ」のお話

イエスに洗礼するヨハネ、ダ・ヴィンチ他画（1470-1475）

新約聖書の記述と別の歴史的文献*から、ヘロデ王の王妃ヘロディアの娘が実在し、その名前が「サロメ」であると特定されている。サロメはヘロデ王とヘロディア王妃の結婚式で華麗な舞踏を舞い、その褒美として“ヨハネの首”を求めたとされる。

ルネサンス期から近代にかけて、芸術や文学で「サロメ」の性格を模索し、男女の関係に強いドラマ性を見い出そうと、「叶わぬ恋ゆえに狂ってしまった美少女」と位置付けることで、画家や作家たちの創作意欲を大きく刺激。そのため「サロメ」は絵画の題材としては洗礼者ヨハネ*の首を持った（或いは首の乗った皿を持った）女性として描かれている。

この方向性を決定付けたのが、オスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」。ヨハネに惹かれながらも拒まれ続けた末に、ヨハネの首を銀の盆に乗せて持ってくるよう義父の王にねだり、ラストシーンではヨハネの首に愛おしげに口づけをするという衝撃の展開となる。

*「マタイによる福音書」、古代イスラエルの歴史書「ユダヤ古代誌」など。洗礼者ヨハネは旧約聖書「列王記」に登場する預言者エリヤの再来といわれた。

ヘロデの宴会、ルーカス・クラナッハ（父）画（1531）

楽劇「サロメ」登場人物、聖書と歴史書から

預言者ヨカナーン

洗礼者ヨハネのこと。ヨルダン川にやってきたイエス（メシヤ、メサイア）を洗礼した聖人。ヨハネはヘロデとヘロディアの結婚の不道徳を厳しく批判していた。なお、イエスの使徒ヨハネ（福音記者ヨハネ）とは別人。

サロメ

歴史上実在した女性。新約聖書では単に「ヘロディアの娘」。サロメの実父はヘロデ大王の息子（ヘロデ・アンティパスの異母兄）、母はヘロデ大王の孫ヘロディア。

ヘロデ王とヘロディア王妃

「ヘロデ王」はヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパス。「王妃」はヘロデ・アンティパスの妃ヘロディア。ヘロディアは前夫と離婚し、娘サロメを連れてヘロデ・アンティパスと結婚。洗礼者ヨハネはこの結婚を不道徳として非難。ヘロデの祝宴の席で、サロメが舞を踊ってヘロデを喜ばせ、褒美として（ヨハネに恨みをもつヘロディアにそそのかされて）ヨハネの断首を求め、実行された。